

ありし日のお母さまを偲ぶ

——三回忌に寄せて——

東郷 敏

御生前から、お母さま、おかあさまと申し上げておりましたので、その様に呼ばせていただきます。

早いものです。光陰矢の如しとは申せ、方丈さまのお母さま。白純大和尚さまのみもとに逝かれてもう三回忌。キツト天国で安らしく、豊かに、新しい世界で、新しい御修行にいそしんでおいでのことだと思っております。

先程来、立派なご法要の中で、遠くに想い、近くに思いながら、ありし日のお母さまを偲

んでおりました。

小さく、まあーるく、やさしいお母さま。とても懐しく、ほのぼのとした想いで時を過しておりました。

白純大和尚さまをして最もご信仰篤く、生佛と称せられたお方でありますから、私の胸の中には、いまだ、お母さまはご健在でいらつしやるような気が致します。

昨年、成寿「夏号」と今年「春号」に、つたない筆ではございましたが、「方丈さまとの

出逢い」について、方丈さまの命により書かせていただきました。あの時点では方丈さまのお母さまは登場しておりませんでした。私も間もなく「宿善の助くるに依りて」この尊いお母さまにめぐり逢うことができました。色々と教えていただきました。

或る時でした。

「ネエ東郷さん、人間、何を見ても、何を聞いても驚きもしなければ感動もしないようになっては、人間はおしまいです。あたり前の事があたり前に出来ればそれで充分。それなのに、多くの人はあたり前のことを疎かにしてしまふ。真理を遠きに求めてしまふ。朝起きたら蒲団を挙げ、顔を洗い、神佛に手を合わせ、家庭に明るく大きな声で挨拶をし、食事は感謝していただく。その中にこそ、光り輝く尊いものがあるのですヨ」

と、淡々とお話くださったことがあります。



私はハツとして、とても新鮮なオドロキと感動が湧いてきたこと、忘れられませぬ。純粹で何時までも美しく、年を重ねたお母さままでした。

こんなは何気ないお母さまなのに、終生、人の為に、ご自分を尽し献げても、捧げても、なお足りないお気持ち、しかもそれを無上のよろこびとされたお方でした。こんなお母さまがそこにいるだけで周囲の人を幸福にする。

特に何か言われる訳でなく、何かをしてくださるのでもないのに、ただ、お顔やご様子を見ているだけで、こちらが幸せになつてくる。

「一隅を照らす尊い輝き」とは、こんなことを言うのでしょうか。「愛に満ちた」日々からかもしかされるこの美しき輝き。お母さまは、キットご自分の胸の中に、ご自分の手で彫り上げた、尊いみ佛さまを持っておいでに

なつたのかもしれない……

このお母さまこそが、今日、横浜成寿山善光寺の隆昌であり、輝きであり、礎なのでございましょう。

本日は、この三回忌法要に寄せて、お母さまに、私の「思い出」に感謝を添えて申し述べさせていたいただきました。

合 掌

平成六年二月五日

